NO ７７

１学年だより

令和３年９月６日（月）

夢の宅配便

１年学年主任
水野　喜代治

パラリンピック閉会

東京オリンピックに引き続き、開催されていたパラリンピックが５日（日）に閉会した。開会式も美しく素晴らしかったが、閉会式も 心に残る素敵な演出でした。

この東京パラリンピックを見て、新しい時代の流れを感じました。パラリンピックの競技がゴールデンタイムにテレビ放映されて、多くの国民がパラアスリートを応援している。このあたり前の光景が、１９６４年の東京オリンピックでは考えられないことだと思います。当時は、障がい者スポーツをほとんどの国民が興味さえ持っていなかったと思います。障がい者に対する蔑視や偏見がなぜあれほど国民の中にあったのか今から考えると不思議な感じがします。障がい者の人を差別する言葉が日常的にかわされていました。大人だけでなく、学生も障がいを持つ同じ学生を差別したり、侮辱するような言動がよく見られました。社会そのものが、障がい者を受け入れない構造であり、環境だったと思います。車椅子や視覚障がい者は、段差や点字ブロックもない駅構内を自分だけの力では、行動できないような環境の中で、苦しんでいたと思います。障がいを持つ人を「片輪者」などと呼ぶことが普通でした。両輪が揃っていない不十分な状態を指している言い方です。障がいをもつことは、不十分で、一人前ではなく「半人前」ということだったのです。昭和から平成にそして令和へ移ろう中で社会は大きく急速に進化してきました。人権意識が高まり、一人ひとりの言動が見直されていきました。障がいがある、ない、ということが人の生き方や人生の価値を決定することではないということがあたり前の感覚として人々の心のなかに浸透してきました。視覚に聴覚に身体に障がいがあることが社会生活していく中でマイナスになるような社会であったり、国家であってはならないという感覚が普通になりました。車椅子の人は、外に出るのに不自由を感じるような社会ではならないし、視聴覚障がいを持つ人が安全に外を歩けないような町では、いけないわけです。

学校で、障がいを持つ生徒を蔑視したり差別したりする生徒が姿を消しました。私は、４年前に出会った中学１年生の感覚に感銘を受けました。運動会や合唱コンクールの行事のときに、優勝や勝ち負けよりもみんなで楽しく充実した行事にしたいと言う思いで行事に取り組んでいました。いままでにない学年の雰囲気に感動しました。競うことより、みんなが楽しめることを求めていました。支援級の生徒も一緒に行事をあたり前に楽しめるためのルールを次々に発案してきました。「ムカデの足はリズムが取れない生徒は手ぬぐいで結ばなくても良い。」このルールで支援級の生徒も入ることができました。「足を結ばない生徒がいたら、平等な競技でなくなる。結ばないチームが有利になる。」と反対する生徒は一人もいませんでした。１位、２位を競うのが目的でないからです。毎年、入学してくる生徒が年々人権意識が高くなっているなと感じます。あと十年、二十年して、今の中学生が大人になったときにさらに素晴らしい優しい温かい世界になっていると思います。

今年のオリンピックはメダルの意識がすこし変化していると感じました。今までは、日本の代表選手で国を背負っているという感じでしたが、スポーツを愛して、自分を表現していると感じました。アスリートの人がメダルを取る取らないではなく、お互いの技や技術やパフォーマンスに共感したり、共鳴して称え合っている姿が単に競っているだけでない大切なものを感じました。国ごとにメダルの数を比較して国力を誇示しているような時代は終わったと思いました。国と国の対抗戦ではなくなったと思いました。アスリートみんなに感謝したい気持ちになるオリンピック・パラリンピックでした。